
コードギアス オレンジダイアリー

えんとつそうじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス オレンジダイアリー

【Nコード】

N8081T

【作者名】

えんとつそうじ

【あらすじ】

前作、オレンジデイズの続編。

オレンジデイズとは違って、読み切りの詰め合わせという形を取ることになりました。

と言っても、えんとつそうじのことだからまた勝手に連載するかも？ その時はあしからず！

と、前置きはここまでにしておいて、帰ってきましたゴッドバルト農園！ 息子ロロを中心に据えたオレンジデイズのその後のお話、

ロロがどのような成長を遂げるのか？ ゼロは？ ナナリーは？
そしてあの男は？ 書くのかどうか分からないけど、皆様に楽しんでいただけたら、幸いです。

では、農園の新たな日常へようこそ

お月様取って！（前書き）

みなさま、お久しぶりです。えんとつそうじでございます。

前作、オレンジデイズは皆様のおかげでなんとか完結をむかえることができました。そして、今回のオレンジダイアリーをはじめることができたのも、皆様のおかげです。

オレンジダイアリーは、前作とはちがって、キャラクターの視点を大事にして書いてみようと思います。

とまあ、細かい話しはここまでにして、

オレンジダイアリー開幕！

お月様取って！

その農園は、ある山の中にある。

見渡す限り広がる背の低い木々には、丸く大きなオレングジがいくつも実りを付け、夜風に吹かれてその身を重たそうに揺らしている。空には大きな満月が光り、山の中に潜む鳥や他の動物たちの寝顔を、優しいな微笑みを浮かべて見下ろしていた。

この農園の名は、ゴッドバルト農園。

その家族が住まう2階建ての家を見ると、2階の窓から薄明かりが漏れている。

ちりんりん、と開けっ放しの窓から入って来た夜風が風鈴を揺らして、少し蒸し暑いこの部屋に涼を届けてくれた。その風が頬に当たただけで、うつすらと額に貼り付いている汗が引いていくのが分かる。

「お母さん、つづき読んで、早く早く！」

「はいはい、でもこの絵本読んだらちゃんと寝るのよ？」

「うん！」

だんだんと重くなる瞼が下がるのを、我慢しているのが手に取るように分かるが、ロロは私と同じ黒い瞳をキラキラと輝かせて、絵本の続きをせがむ。その瞳が愛らしくて、私は夫によく似た緑がかったロロの黒髪を撫でて、指を挟んでいた青く大きな絵本を開いて、寝る前の読み聞かせを再開した。

「お母さん、お話読んで」

去年の春頃だっただろうか？ いつもの様に、私とあの人と三人で床につこうとしたとき、ロロがカノンさんに買ってもらった絵本を持ってベッドに飛び込んできた。読んであげると、ロロは今みたいに眼をキラキラと輝かせて、絵本に夢中になり、そして…いつの間

にか眠っている。子守歌代わり、というと少し寂しいけれど、ロロはそれから毎晩のように夜寝る前に絵本を私に読んで欲しいと、頼むようになった。

それから、『大きなかぶ』『マツチ売りの少女』『桃太郎』…次々と絵本が我が家に増えていった。トーキョーに買い物に出た時買った物や、ロロが絵本にはまっていると聞きつけた風沙さんやセシルさんからいただいた絵本は少しずつ本棚にたまっていき、今では何を読んでもらおうか、とロロが困る程までの量となった。

「すごい、ねえお母さんこの人、こんなたかいはしご登ってこわくないのかなあ？」

「そうねえ、きっと娘さんのために一生懸命だから、そんなのへっちゃらなのよ」

「かつこいいねえ」

ロロはそう言つと、マジマジと絵本のキャラクターを尊敬の眼差しで見つめた。

今日、私がロロに読んでいる本は青い装丁に丸い大きなお月様が描かれた少し大きめな絵本、『パパ、お月様とつて』だ。小さな女の子がお父さんに空に浮かぶお月様をとつてきて欲しいとお願いして、お父さんが長い長いハシゴを用意して、月まで昇っていくというお話だ。お父さんがハシゴをのぼすとき、ページが上に開くよう工夫されていて、ロロに読み聞かせている私もつい夢中になってしまった。

「すごい絵本ね…あら、ロロ？ 寝たの？」

「すうー…すうー」

いつの間にか、寝息を立てている息子に夏布団をかけて、絵本にしおりを挟む。正直、続きが気になるけど、私だけが終わりまで読んでしまうと、ロロはきつと怒るだろうから。

「咲世子、ロロは眠ったのか？」

「あなた…ええ、たつたいま」

寢室のドアを開けて入って来たのは、私にこの暮らしをくれた最

愛の人、私の夫ジェレミアさん。ジェレミアさんは、ほかほかと湯気を立てる風呂上がり体の体を机のイスに預けると、枕元に置かれた絵本に目を落とした。

「なんだ、また絵本を読んでいたのか」

「ええ。途中で眠ってしまいましたけど」

「『パパ、お月様とつて』…か」

絵本の中のパパと、自分を重ねたのか、ジェレミアさんは少し困ったような微笑みを浮かべて、首にかけていたタオルで髪を拭いて、扇風機のスイッチを入れて涼みはじめた。

「フッフ、もしかしたら明日口口に言われるかもしれませぬね、」
お父さん、おつきさまとつて」って」

「うゝ、やめてくれ。この子はそう言うこと、平気で言うからなあ」

「あら、その時は頑張りませんと父親の面目が立ちませんよ？」

冗談に、本気で困った顔を見せるジェレミアさんを見て私は思わず破顔してしまった。ジェレミアさんはイスからひょいと立ち上がって、枕元の絵本を手にとって真顔で読み始めた。

もしかして、本気で月の取り方を考えているのかしら？

そんな事を考えている内に、私の意識はまどろんで、緩くなって…深い眠りに落ちていった。

翌日

「お父さん、お月様とつて！」

朝食を終え、カノンとアーニヤは仕事の準備をするために各々の部屋に向かい、咲世子が食器を洗い、私はソファに腰掛けて新聞を広げていた。その出だしを読もうとした瞬間、頬に米粒を付けた口口が、私の膝の隙間から竹の子のように生えてきて、瞳を輝かせながらそのセリフを言った…いや、叫んだ。

それを聞いて、私は思わず洗い物をしている咲世子に首を向けてしまった。助言と救援を求めるためだ。咲世子も口口の声が聞こえ

ていたらしく、こちらに振り向いている。だが、私と違ってその表情は笑いを堪えるのに必死という風情だ。『やっぱり』と『がんばってください』という彼女の声が、なぜか耳ではなく心に聞こえた。

「…どうしたの？」
「…いや、何でもない。ロロ、なんでいきなりそんな事言うんだ？」

「えっとね、きのうお母さんに読んでもらった絵本に出てきたパパさんがね、すごく格好良かったの！ だからね、お父さんもパパさんと同じことしてみてほしいの！」

「そうか…そうか」

さて、どうしたモノか？

ロロの瞳を見る限り、本気で私が月まで行くことを期待しているのが分かる。それは、とてもとても嬉しいことなのだが…現実と絵本の世界は違う。誰がどうやったって、ハシゴをかけて月まで行くのは不可能だ。KMF使って月まで行く…いや、無理だ。今現在で、大気圏突破できる性能を持ったKFMは存在しないし、もしあったとしても今の私はタダの民間人。そんなKMFはおるか、サザランドにさえ乗ることはできない。

「ロロ…息子よ、良く聞いてくれ」

「うん！」

「お父さんもいろいろ考えたんだが…その願い、少し無理があるな。月まで届くハシゴは無いし、大きなロボットを使っても行けるかどうか怪しい…いいか？ そもそもだな、月と地球は38万4400？も距離が離れているんだ。しかも、地球には大気圏というものがあって」

「もういい！！ お父さんのばか！」

「あ、ちょ、ちよつと待ちなさいロロ！」

私の言葉と新聞を、声と体で引き裂きながら、ロロはアーニヤの部屋に向かって走って行ってしまった。そして入れ替わるように私達のやりとりを見守っていた咲世子が、そつと歩み寄ってきた。そ

の表情は、あきれ果てて困惑している…といった具合だった。

「あなた…」

「言っ…自分でも、情けないと思っていたところだ」

真つ二つに引き裂かれた新聞を片付ける私の肩に、咲世子はそつと、同情するかのようには手を置いた。

「うん…今日も良い天気ねえ」

サンサンと輝く夏の太陽に向かって背伸びすると、目には見えない紫外線が私の全身に染みこもうとして、日焼け止めクリームに弾かれているのが分かった。熱く、世界を真つ白に染め上げるようなこの季節は好きだけど、紫外線だけはダメ。

「特に歳をとると余計に気になり出すのよね…あら？」

ふと、何やら気配を感じて目の前のオレンジ畑から庭の方に視線を向けると…桃色のフワフワした髪の上に麦わら帽子をのせた女の子と、その弟で私の甥っ子…黒髪の小さな男の子が何やら難しい顔を並べている。

「アーニヤ、ロロちゃん何してるの？」

「あ、良いとこに来た」

「カノンおばちゃんも手伝って！」

「な、なにしてんのよ…って、本当に何してたの？」

そばに寄った私に気がつく、二人は分けの分からないことを言う。仕事をさぼる算段でもたてていたのかと思っただけ、どうやら違うらしい。いや、厳密に言うとならばサボっているのと代わりはないのだけど、二人は何か別の事に夢中になっているようだ。

いつも、咲世子さんが綺麗に掃除している庭に、納屋からとってきたであろうハシゴやロープ、虫取り編みや釣り竿…etc etc、がおもちゃ箱をひっくり返したかのようにばらまかれていた。…え〜と、二人は何をしていたのかしら？」

「あのね、お月様を取る練習でね、お日様を取ろうと思ったの！」

「うん、ロロちゃんちよっとお姉ちゃん借りるわね」

日に焼けて、赤くなつた顔を綻ばせて嬉しそうに説明するロロちゃん
は天使のように可愛いんだけど、それは説明になつていない。
私は少し背が伸びたアーニヤの肩に腕を絡めて、ロロちゃんに背を
向けた。

「ちよつと…！ 状況が良く飲み込めないんだけど！？」

「私もよく分からないんだけどね……」

そうして、ロロちゃんに聞こえないように小声で、アーニヤは今
朝いつものオーバーオールに着替えてる最中いきなり部屋に乱入し
てきたロロちゃんから聞いた話を、私にそのまま伝えてくれた。

「へえ、懐かしいわね『パパ、お月様取って』なんて…うん、ど
んな話だつたかしら」

「カノン知ってるの？」

「もちろんよ。私が子供の頃からある絵本よ…それにしても、ジェ
レミア情けない」

「うん、パパ失格。だから、ロロはオレンジがやらないなら自分が
やる！ って言いだして…」

「それで、太陽をお月様代わりにして、夜のためにリハーサルして
たのね」

「うん」

なるほど、つまり庭中に転がってるこれらはロロちゃんとアーニ
ヤの四苦八苦の跡か。本気で月に手が届くと思つているロロちゃん
も可愛いけど…それに付き合つてあげているアーニヤも負けないほ
ど可愛く思える。

「ねえ、二人とも何してるの？」

「んーん、なんでもないわよ。よし！ ロロちゃん、お姉ちゃんか
ら話は聞いたわよ。カノンおばちゃんもお月様取る練習手伝つたげ
る！」

「ホント！？ おばちゃん大好き！」

「えへへえ…もつと、もつと言つて」

「キモイ…」

アーニヤが何か言ったが気にしない気にしない。彼女がこの叔母の楽しみを理解するのは、まだ先の事なのだから。

だから精一杯、私は叔母ちゃんの楽しみを味わおう。

「よし、じゃあロロちゃんは網を持って。そのロロちゃんを私が肩車！ そうすれば、お日様に届くかもしれないでしょ？」

「うん！」

トトト、と駆け寄って、私の足に抱きつく小さな男の子。その信じ切った瞳に、バカだなあ、とも思う。だけどそれ以上に、それに付き合う私は叔母バカなのだろう。

目に入れても痛くない、食べちゃいたくなる…今までオーバーに感じていたその『可愛い』の表現を実感しつつ、私はロロちゃんの軽く小さな体をひよいと持ち上げて、肩に背負った。

一時間後。

「まったく、あいつらと来たらどこで遊んでいる？」

オレンジの収穫日が目前に控えているというのに、アーニヤとロロの姿はオレンジ畑にはなく、カノンも事務仕事を咲世子に任せっきりになっている。大方、どこかで遊んでいるのだろうが、それは仕事片付いてからでも良いはずだ。

「これは一つ、ガツンと叱るべきか？ いや、今朝のこともあるしこれ以上ロロに嫌われるのは…いやいや、ここは心を鬼に…いや、それでもだな…」

あの子が生まれてから、もう四年の月日が流れた。私の体のこともあり、どこか体に疾患がないか心配していたが、ロロはそんな事お構いなしに、この農園ですくすく…いや、ずんずんと成長してくれている。私達両親に似ずに、明るく活潑な性格に育ったのは、ひとえに遊び相手をしてくれているカノンと、姉のアーニヤのおかげだろう。

だが、ロロはもう四歳。そろそろ、少しずつでも責任というモノ

を学んでも良い年頃だ。

「よし、言うぞ…あの子が遊んでたら、ガツンと…叱ってやるのがオヤジのつとめだ」

たとえ嫌われても、疎まれても、我が子をよりよい未来に導かなければならない。それが、父親というモノのはずだ。

と、私が覚悟を決めたときだった。

「ヴヴヴウウ…ゲホ、ゲホ！」

庭から、なにやら異様なうめき声、人の声…で良いのだろうか？

まるで、物の怪の類が苦しんでいるような声が、庭から微かに、私の耳に響いてきた。

「なんだ？ お前達、そこに…いる…」

声をたどって、私は真っ直ぐ庭に向かった。そして、そこで繰り広げられている光景に、思わず声を失ってしまった。

「アガガガ！ ファイトー！ ワタシイ！」

「が、頑張つてカノン…！ ロロ、と、届きそう？」

「うー、うー…！ ダメ、まだ届かない！」

全身から滝のような汗を流しているカノンの肩にアーニヤ乗り、その上にアーニヤの麦わら帽子をかぶったロロが肩車されて、賢明に太陽に向かって虫取り編みを振っていた。ロロはまだ元気だが、二人分の体重を支えるカノン、激しく動くロロを抑えるアーニヤは、疲れ切っているのが一目で分かる虚ろな目をしている。

「お、お前達…何をしている？」

「あ、ジエレミア！ 良いところに、ちょ、ちよつと代わつて、もう腰が…腰があ！」

「カノン…！ 今動いたら…！」

カノンのぶるぶると震える膝が、がくんと折れた。

「あ、も…だめ」

「何？ あ、うおおお！？」

そのまま力尽きたかのように前のめりに、カノンは倒れた。すると当然、上に乗っている二人も倒れてくる。

私はアーニヤとロロを受け止めようと、咄嗟に腕を伸ばした。
が

「オレンジ、そのまま」

「へ？　ぐがぼ？！」

アーニヤは崩れるカノンの背をロロを肩車したまま蹴って飛ぶと、私をクッション代わりに押し倒した。ものすごい勢いで背中を地面に打ち付けて、一瞬肺が縮んだ。

「ぐ…い、一体…何をしていた？」

「オレンジが情けないのが悪いんだよ…でも、私も疲れた」

そう言つと、アーニヤはロロを私の胸に下ろしてから、糸の切れたマリオネットのようにドサリとその場に倒れた。

「本当に、何をしていたんだ」

「…フン！」

モノが散らかり放題、死屍累々の庭。その経緯を胸に乗る息子に聞いても、ロロはプイツと私からむくれっ面をそらただけだった。

その日は結局、散らかった庭の片付けと熱中症になりかけていたカノンとアーニヤの介抱で、仕事にならなかった。ロロは、二人の事を心配して氷や冷たい飲み物を用意するなどの手伝いをしたあと、肩を落として2階の寝室に上っていった。

なんとか二人が回復したのが、完全に日が落ちた夜。夜空には、星々と美しい満月がかかっている。二人が食べやすいようにと、咲世子は夕食にそうめんを作った。と言つても食べるのはカノンとアーニヤだけ、私達夫婦はロロが下りてきてからだ。

「こうなったのも、ジェレミアのせいよ」

額にジェルシート《冷えピタ》を貼ったカノンが、咲世子が用意したそうめんをすすりながら私をジトリと睨みながら言った。そして、2階にこもりっぱなしのロロを見るように、一度だけ天井に愛おしい視線を向けた。

「何故だ？　私は何も悪いことは…」

「した。ロロのお願い聞かなかったでしょ？」

反論しかけた私の口を、アーニヤが塞ぐ。言い返せなくて、たまらず咲世子に助け船を出すよう目線を送ったら、咲世子は楽しそうな微笑みを返すだけだ。

「う…た、たしかに情けないことをしたと思ったが…だが、月を取るなんて…」

無理だ。と、続けようとしたとき、カノンがため息を吐いて、それを引っ込ませる。

「ああもう、本当にくそ真面目なんだから！ いい？ 別に、月を取れなくても良いのよ」

「なに？」

「ロロちゃんね、絵本の中のパパさんが娘のためにがんばったように、あんたに頑張って欲しかったの！ 理屈じゃなくて、行動を見せて欲しかったのよ」

「む…むう」

カノンの言葉に、言い返す言葉を見つけることができなかった。

「自分のために頑張ってるお父さんを見るのが嫌いな子供なんていないわよ」

「…そうだな、その通りだ」

「それが分かったのなら、行って上げなさい。ロロちゃん、お腹すかせてるわよ。月のことは、明日また考えればいいから」

「うむ…ん？」

カノンに促されて、ちゃぶ台から立ち上がったとき、ふと私の目にあるモノが映った。それは、本当に偶然だったが、確信の持てる閃きだった。

「どうしたの？ ぎっくり腰？」

「バカ言っつな…アーニヤ、カノン、咲世子、月のことを話しあう必要はない」

「え？」

「何故なら、今から私がロロに月を取って来てみせるからだ」

コンコン、とノックしてからジェレミアは親子三人で使っている
寝室の扉を開けた。

「ロロ、いるか？」

「……」

灯りのつけられていない部屋から返事は帰ってこない。だが、窓
から差し込む月光が、その窓辺にもたれる小さな男の子を照らして
いた。

「ロロ、まだ怒ってるのか？」

「…うつん」

「なら、なぜしたに下りてこない。みんな、お前を待っているぞ？
お腹も減っただろう？」

「うん、だけど…カノン叔母ちゃんとアーニヤ姉ちゃん、僕のせいで
倒れた。それで、お仕事ができなくて…」

ぽつりぽつりと呟く小さなその声は、どこか擦れていて聞きと
りづらい。ジェレミアが息子に歩み寄ると、ロロの可愛らしい小さ
な目から、涙が頬に伝った跡があることに気付いた。

この子なりに気にしていたのか、と息子の心の成長を嬉しく思い
ながら、ジェレミアは微笑む。

「二人は、そんな事気にしていないぞ？　だが、確かにお前のワガ
ママで今日仕事にならなかったのは事実だ」

「…うつん」

「その事を、反省しているかい？」

「うん…ごめんなさい」

「良い子だ」

ポン、とジェレミアはロロの頭に手を置いて、自分と同じ髪を愛
おしそくに撫でる。そして、腰を下ろしてロロと視線を合わせた。

「なあ、ロロ…お父さんな、実はさっき月を取ってきたんだ」

「え？」

「見たいか？」

「うん！」

暗く沈んでいた表情が一転、期待と喜びに塗り替えられるのをみて、ジェレミアはこそばゆそうに頬を緩める。昼間は、説教しようと考えていたくせに、自分も甘くなつたものだ、内心自嘲しながら、1階から持ってきたそれを、窓辺において、ロロをひよいと抱き上げる。

「うわぁ……」

「どうだ？ 絵本のようにには行かないが……ちゃんと月があるだろう？」

ジェレミアが窓辺に置いたモノ、それは至って普通の、白いマグカップだった。だが、その中には水が充ち満ちている。

その水の表面に、夜空に輝く月がそのまま映りこんで、微かに揺れていた。

「すごぉい……お父さん、コップに月が入ってるよ！」

「ああ、綺麗だろう？」

さすがに、そうめんのツユに映り混んだ電灯がヒントになったとは言え無かったが、ジェレミアはロロの瞳が喜びと満足に輝くのを見て、胸をなで下ろした。

いつまでこうしていればいいのか？ とジェレミアは考えたが、それを察したかのようにロロの腹の虫が鳴る。

「ロロ、お腹すいただろう？ お母さんがそうめん作ってるから、そろそろ下に行かないか？」

「うん……寝る前に、またお月様見ていい？」

「もちろんだ」

「えへへ……お父さん、今日はゴメンね……大好きだよ！」

「……お父さんもだ」
ロロに耳元で囁かれ、ジェレミアは思わず赤面してしまった。そして、少し歩く速度を落として、息子を抱えたまま家族が待つ居間に下りていく。

その背中を、空に輝く月と、夏風に揺られる水面の朧月だけが見

て
い
た。

お月様取って！（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！

いかがだったでしょうか？ 今回のオレンジダイアリーは、私が思いついた話しをそのまま放り込んでいく、一話完結の短編小説形式を取りたいと思います。

そのため、いきなりここかよ！？ という時間の流れの話しが飛び出してくるかもしれませんが、それはそれで、ダイアリー《日記》をパラパラ読んでいるモノと、思ってご容赦ください。

それともう一つ、今回のオレンジダイアリーでは、皆様からのリクエストを常時募集しております。こんなジェレミアが読みたい！ こんな話を作ったら面白いんじゃない？ というご意見がございましたら、どしどし感想かメッセージ機能でお送りください。また、キーワードも募集しております。たとえば今回の『月』のように、なにか皆様からキーワードを提案していただければ、それについてえんとつそうじが無い頭をひねって話しを考えて見ますので、どうかお暇があればリクエストおねがいたします。

そんなこんなで、長くなって申し訳ありません。これからよろしく願います。

では、次の後書きで

雪とけて、春（前書き）

最初に一言。本当にすいませんでした。

オレンジデイズを完結させて、返す刀でオレンジダイアリーを初めたのに、皆様に期待をさせておきながら何も言わず休載して本当にすいませんでした。

私自身、小説に関して思うところあって色々と悩んでいました。オリジナルをアップしたりして、迷走しましたが、最終的に原点に帰ろうと思い立ち、久しぶりにコードギアスの世界に飛び込みました。

これからもどうぞえんとつそうじをよろしく願います。

雪とけて、春

「さあて！ 今日も一日がんばるぞ！」

「うるさい、口口が泣いちゃう」

「ひぎやあああ！」

朝食の後、山びこを起こすほどの大声を張り上げたジェレミアをアーニヤは窓ガラスを割った向こう、緑色の実を実らせるオレンジ畑の手前まで蹴り飛ばした。その様子を、もはや当たり前のようにお茶をすすりながらカノンは眺め、咲世子は楽しそうに微笑む。

そして、その胸に抱かれる赤ん坊……口口・ゴッドバルトは、不思議そうにその小さな目をパチクリとさせている。

ゴッドバルト農園は、今日も平和です。

「おのれアーニヤめ。あいつ年を重ねることに攻撃が強くなってるのか？」

厳しい寒気も薄まりはじめ、段々と温かくなり始めた春の日。うすら温い日差しを背に受けながら、ジェレミアは本意ながら自分が割ってしまった居間の窓ガラスを新しい物に交換していた。

緑がかった黒髪を短かすぎないよう整え、動きやすいシャツとジーンズに身を包んだ姿はもうすっかりと彼の生み出す空気になじんでいた。数年前のブリタニア軍人としての彼しか知らない者がその姿を見たら、思わず我が目を疑うだろう。それほどに、今のジェレミアは柔らかかささえ感じるほど穏やかな表情に満ちていた。

「……いや、それにしても……可愛いものだなあ」

彼を変えたものはなにか？ 諸々あるが最大の要因は新しく張り替えたガラスの向こうで優しい微笑みを浮かべる女性と、その胸の中でおっぱいをもらっている赤ん坊の存在だろう。

「もっ、そんなに見つめられると照れてしまいますわ」

「あ、ああ。す、すまん」

頬を赤らめる咲世子にドキリとして、ジェレミアは思わずその場で頭を下げた。そして、所在なさにきよきよと辺りを見回してから、その場で靴を脱いで窓から家の中に入る。

「となり、座るぞ」

「？ どうしたんですか改まって」

「い、いや…その、一瞬お前が今までのお前とは別人に見えてな」

「え？」

「い、いや！ な、なんでもないんだ。うん、座るぞ座る…！」

急に挙動不審になった夫に首をかしげ、やがて咲世子はおかしそうに笑った。

柔らかい女性である。どこが、というわけではなく相対する人の肩をフツと抜かせる不思議な雰囲気をもとっていると言うべきか。肌は雪のように白くしおらしささえ感じるが、その黒い瞳は優しさの他に頑とした強さをたたえている。オレンジ色のセーターと七分丈ズボンというラフな格好をしているが、数年前は今も時々身につける白と黒のメイド服を着込み、メイドとして、そして忍びとして活動していた。

そんな二人の出会い……戦いだった。

初めは敵どうしとして。だがそれは一時のことで、主君と仰いだ少年のために、二人は命を賭して世界を相手に戦い抜いた。それから時は経ち、様々な人々との出会いや思い出を刻んでいった。そして新しい命をさずかり、思わぬ人との再会を果たし、今の平和を享受していた。

「あの…どうしました？」

「え、あ…い、いやなんでもない」

隣に腰掛けてから、不思議そうに自分の顔を眺めてばかりいるジェレミアにじれて、咲世子は言葉をかけた。ジェレミアはそれにハツとしてすぐ目をそらしたが、さすがに不自然だと思ったのか照れくさそうに頬を掻いて妻と向き合った

「いや、その…なんだ。咲世子お前、口口を生んでから」

「太った？」

「い、いや違う違う！ その…き、綺麗になっただな」
「え？」

齒の浮くような言葉に、言った方も言われた方も顔を真っ赤にしてしまった。その様子を、母の胸に顔を埋める小さな瞳が見上げている。

「い、いきなり何を…」

「その、あの…いやあ何でかな？ 上手く言葉にはできんのだが…
…口におっぱいをあげているお前がすごく…愛おしくなっただ。胸がキュツとなるといつか、その…なんというか」

「もう、大事なところを曖昧にしないでくださいな」

「う、すまん」

「だけど…」

「？」

「嬉しい、です…よ」

上手く言葉を紡げずにシュンとなってしまった夫を可愛いと思いつつ、咲世子は素直に胸の内を語った。ここらへんがジェレミアが咲世子に勝てないところなのだが、二人ともそれに気付いていない。しばらくの沈黙があり、雲一つない春の日差しだけが流れる時間が瞬間とある。

「それにしても…：良く食べる、いやよく飲むなこいつは」

「ええ。良いことですわ」

二人の目は、自然と数ヶ月前に授かった我が子に落ちた。そのとき、ジェレミアはあることに気付く。咲世子の白い頬が、心なしか蒼く見えた。

「咲世子、もしかして具合でも悪いのか？」

「え？ ああ違いますよ。最近、貧血気味なんです。この子のせいですわ」

「どういうことだ？」

「フフフ。あなた、母親が子供にあげるおっぱいのもと、ってなん

「だか知ってます？」

「？ 知らん」

「それは、母親の血なんですよ」

少しイタズラっぽく言った咲世子の言葉に、ジェレミアは目を見開いた。驚いている夫の目を見ながら、咲世子は言葉を続ける。

「母親はその身に赤ん坊を宿すと身体の中で母乳を出す準備をします。そのとき、母乳の原料になるのが血なんです。だから、おっぱいをいっぱい飲む子供を持つ母親は少し貧血気味になるんです」

その人体の神秘が、ジェレミアに与えた衝撃は小さいものではなかった。その事をしらずに、もっと良く飲んで大きくなれと我が子に囁いていた自分を恥じた。

「す、すまない咲世子。その事を知っていたらもっと、もっと……」

「あら、なんで謝るんですか」

侘びの言葉を遮るように、咲世子は夫の唇を人差し指で押さえる。

「この貧血は、この子が元気に育っている証。母親としてこれほど嬉しいことはありませんよ。だからあなたも、そんな顔せずに喜んでくださいな。私達の子供の成長を」

そう言って笑う咲世子の顔は、ジェレミアには輝いて見えた。そこに、さっき自分が咲世子に感じた美しさ、愛おしさの正体を見た気がした。

「……フツそうか。そうだな、口口が元気に育っている。我が子がこんなにも健やかに……こんなに嬉しいことはない」

「でしょう？ それが、たぶん……親というものなのでしょうね」

異論なく、まったくその通りだ。ジェレミアはうなずき、満足したのか母の胸から口を離して眠たげに目をこする我が子の頬を撫でた。

「あら口口。もういいの？ それじゃ、背中ポンポンしましょうね」

「うむ。だが咲世子、本当に体調が優れないときはすぐに言ってくれよ。無理するのはダメだからな」

「はい。昔のような無茶はしませんよ。でも、最近は本当に楽をさ

せてもらってますよ。カノンさんやアーニヤがお手伝いしてくれますから……あなたはあまりしてくれませんか」

「そ、そんな！ さ、皿洗いはするぞ」

「たまに、でしょうか？」

ジェレミアはその言葉に反論しようとして……できなかった。たしかに、たまに、なのである。

「うぐぐ……す、すまん」

「許しません。昨日なんて、私をココに残して先に寝てしまいましたしね」

「そ、それはだなあ」

「言い訳は聞きたくありません」

本気なのか冗談なのか、プイとすねて見せる咲世子に、ジェレミアは情けなる程狼狽した。そしてキツと目を結び、来た抜かれた身体をぶるつと震わせてから。

「すいませんでした」

と謝り直した。年を重ねる事に妻に弱よわくなってしまふ男なのだ。そんな夫の姿を見て、咲世子は少し唇をとがらせながら口を開く。

「もう、昨日は本当に寂しかったんですよ。ですから……」

「ん？」

チヨイチヨイと、手招きして夫の顔をそばに近づける。

「たまには、うんと可愛がってください。もう身体は大丈夫、ですから」

「ブツ！」

妻の思いがけぬ言葉に、ジェレミアは思わず嘖き出してしまった。聞き直そうと思ったが、咲世子は顔を真っ赤にしてそっぽを向いている。二言はないと、察しさせるには十分すぎる態度だ。

しばらく嫌な沈黙。だが、その沈黙の中でジェレミアは己の幸福を感じていた。家を持ち、新たな一生をかけるに値する仕事を持ち、家族を持ち、子を成し、そしてこんなにも愛らしい女を娶ることが

出来た自分が幸福でないはずがあるのか？ いや、ない。もしかしたら、世界で一番の果報者なのではないかと、ジェレミアは己の現実に戸惑ってしまった。

沈黙を破ったのはジェレミアだった。

「あ、あの…… 咲世子。その……」

「は、はい」

咲世子は名を呼ぶと、恥ずかしそうにうつむきながらこちらに顔を向けた。頬が赤いのは、己の言葉をはしなないと恥じているためだろう。その姿に、ジェレミアは思わず生唾を飲んだ。

「そ、その…… いまさらこんな事を言うのは何だが…… これからもよろしくお願いします」

「は、はい。こちらこそ」

「それから」

「え？」

「これは…… 今夜の手付け」

と言った言葉は、途中で切れた。咲世子は夫の言葉を聞くと同時に、優しく抱き寄せられ唇をふさがれている自分に気付く。夫の温もりを感じながら、ふと我が子の前でこんな事をして良いのか考えたが、それはあまりにも無粋だと思いなおして、夫に身をゆだねた。

「…… もう、卑怯ですよ」

「も、元軍人だからな。奇襲も兵法のうちだ」
「…… バカ」

唇を離し、妻は夫の肩にそつと身を寄せた。夫は妻の肩に手を回し、しっかりと抱きしめる。二人の視線の先には、肌寒い風に揺れるオレンジ畑が続いていた。

f i n

「クククク……！」

「オレンジ、ロロの前であんな事」

「もう、本当に可愛いんだからあの二人」

「後でおしおきしてやる」

と、居間で寄り添い合う二人の背中を見つめる桃髪の乙女達が居たことは、ココだけの話。

雪とけて、春（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました。

オレンジデイズ、久しぶりに描いてみると本当に難しくて四苦八苦しましたが、メチャクチャ楽しかったです。

ロロが生まれ、子供がいる状態のゴツドバルト農園をどう書いていくかまだ悩むところが多すぎますが、そこを楽しんでゆつくりと書いていこうと思います。

TPP反対！ 二次創作に光を！ と、そんな事をかんがえつつ、今日のところはこれでおさらばです。

それでは、また次のあとがきで。

えんとつそうじでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8081t/>

コードギアス オレンジダイアリー

2011年12月15日20時56分発行